

ベニバナインゲン「常陸大黒」における播種期と生育・収量

〔要約〕

ベニバナインゲン「常陸大黒」を6月下旬より7月上旬まで約10日間隔で播種した結果、播種期が遅くなるほど収量は高くなる。また、高温年には大粒割合は低くなる傾向が見られる。

農業総合センター山間地帯特産指導所

成果区分

技術参考

1. 背景・ねらい

「常陸大黒」は県北地域における特産品として栽培が増加しているが、標高がそれ程高くないところでは開花しても結実が悪く収量が不安定であったり、茎葉の繁茂が旺盛となり収量が上がらない。そこで、播種期と生育・収量との関係を検討した。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 開花・結実期の平成18年の平年比平均気温は8月が+0.7、9月が-0.4、平成19年の平年比平均気温は8月が+0.4、9月が+1.5（平成18年の平均気温は8月24.4、9月21.0、平成19年の平均気温は8月24.6、9月21.2）(表略)。
- 2) 平成18、19年とも開花期は、播種期が遅いほど遅くなったが、成熟期はあまり変わらなかった(表1)。
- 3) 子実重は、播種期が遅いほど高くなった。平成19年は、播種期が遅いほど直径が25mm以上の大粒割合は低くなった(表1)。
- 4) 着莢が始まった9月の支柱トンネル内の照度は播種期が遅いほど高くなった(図1、2)。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 育苗方法は、種子を紙ポット(角7.5cm×高7.0cm、園芸培土)に播種後、10日前後育苗後ポットごと移植。移植床はポリエチレンフィルム(白黒ダブルマルチ)にてマルチした、畝間200cm×株間100cm×条間60cmの2条。施肥量(kg/10a)：基肥N-10 P₂O₅-40 K₂O-40(硫加燐安500)、ようりん200、堆肥1,000とした。
- 2) 平成18、19年とも標高140mの試験結果である
- 3) 平成19年は、訪花昆虫のクマバチやミツバチが平年に比べ少ない年の試験結果である。
- 4) 滞水に弱いのでベッドは通路より10cm以上高くした排水対策をとり、マルチ上には水が溜まらないようにする。

4. 具体的データ

表1 播種期別の生育・収量

試験年次	播種期 (月日)	開花期 (月日)	成熟期 (月日)	1株莢数 (莢/株)	1莢粒数 (粒/莢)	子実重 (kg/a)	子実重の 同左比	百粒重 (g)	大粒 割合 (%)
H18	6月23日	7月30日	11月12日	58	2.15	23.3	100	217	50
	6月30日	8月9日	11月10日	71	2.17	32.9	141	221	60
	7月10日	8月14日	11月10日	73	3.04	44.5	191	217	51
H19	6月20日	7月27日	10月25日	30	2.99	12.8	100	250	51
	6月29日	8月4日	10月27日	27	3.10	15.0	117	225	42
	7月13日	8月16日	10月30日	46	3.04	22.1	173	212	39

注)*平成19年6月20日播種区は1本仕立てとした

開花期：全個体の40～50%が開花始に達した時期

成熟期：全個体の80～90%の莢の大部分が変色し、子実が品種固有の色を表した時期

子実重：粒の長さ20mm以上の形状、色彩の良好なもの 大粒割合：粒長25mm以上の割合

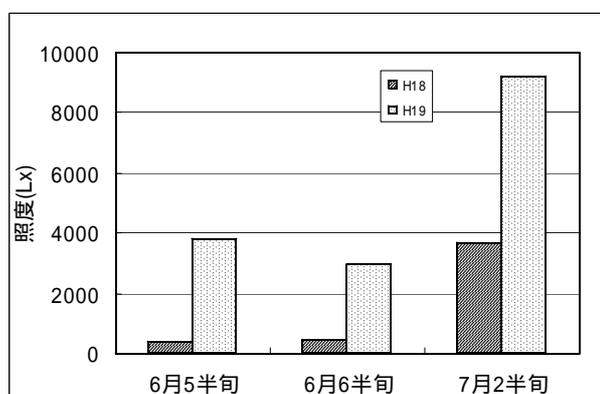


図1 平成18と平成19のトンネル支柱内照度

注)測定高：地上130cm 測定日：平成18年9月11日、平成19年9月4日



6月20日

6月29日

7月13日

図2 播種期別のトンネル内の繁茂の様子(平成19年9月4日)

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

ペニバナインゲン「常陸大黒」の安定栽培技術の確立・平成18年度～20年度・山間地帯特産指導所